

# 國學院大學 渋谷キャンパス

ランドスケープ設計=MLS (Mitani Landscape Studio, Inc.) ランドスケープ施工=箱根植木ほか  
写真=若林勇人、田中博\*、箱根植木\*\*

キャンパス広場全体。神殿まわりの色濃い杜と敷地内の既存の緑、年を経たヒマラヤスギなどが連続している。既存のヒマラヤスギやスタジイの足元周りの地盤高さを変えない前提で、設計された階段広場。階段によって出来る平場部分の3つの空間領域で、空間の序列をつくっている

めに  
學院大學※は、2002年に創立120周年を迎え、  
力を契機とし、建学の精神を核にしながら、時  
変革に対応できるキャンパス再開発を計画、8  
の工期を経て、2009年10月に竣工した。再  
計画を進めるに当たっては、日建設計の建築  
朝田志郎氏との強力なコラボレーションを進め  
た。

#### 型キャンパス

##### たなる創造・そして未来へ

京都渋谷区内に位置する國學院大學は、環境良  
文教地区に位置するが、キャンパス内を2本  
道が東西に分断し、キャンパスとしての求心性  
体感が不足していた。したがって、建築とラン  
ケープの配置計画のテーマは、公道によって3  
分断されている敷地を一体として、豊かな出会  
場をつくることであった。そのために校舎を高  
密度化、足元回りに豊かな外部空間を生み  
、キャンパスの一体感を醸成することとした。  
築配置としては従前、点在していた各々の機能  
的配置し、これらの3つの分断されたエリアを  
的にも動線的にも繋ぐ動線の要として、地域に  
全に開いた「千年の道」と名付けた貫通通路の  
を設けた。都市型キャンパスでは、限られた面  
校地を囲い込むより都市に開き、地域と一体と  
ることによって、キャンパス空間はより「広がり  
を持つことが出来る。従来型の閉鎖的なキャン  
スではなく、都市型大学として、扉や門扉を設け  
限られた校地を開放し、地域と一体となったキャ  
パスを創出することとしている。  
キャンパス軸の「千年の道」に張り付く巨石「モ  
ュメント」や歴史ある「神殿」、新しく設置され  
「レストラン・カフェ」などの都市型便益施設が、  
の企画するイベントや学術会議、一般公開され  
る資料館などからの情報発信と共振するような  
とすることを意図した。また、神殿や神殿林も含  
て「土地の歴史性」を尊重し、区制定の「散策路

ネットワーク」の一部を構成する核として歩道の拡  
幅整備も行うなど、地域の安全にも貢献できるよ  
うな計画とすることとした。

#### 計画+設計

オブジェクトの配置計画として、大学のシンボル  
である神殿を守るように千年の杜（神奈備の杜）は  
存在しているが、その結界部分に小さな「流れ」（神  
奈備川）を設え、静謐な領域感をつくり出した。こ  
の流れは、玄関石裏部分で地中に消えるが、この部  
分に小滝を設え水音で学生や来客を迎え、キャン  
パスに一步足を踏み入れると同時に、別の空間に入  
たことを感じてもらえる計画とした。

敷地内に生育する神殿の杜や大径木を出来る限り  
保全、加えて新しく若木を補植、古いものと新しい  
若木が共存でき、持続可能な杜環境を整え、その地  
域の持つ歴史性を維持・保全し「千年の杜」となる  
ことを目指した。また、モニュメント「翔」と名付  
けられた彫刻家澄川喜一氏作の巨石二基は、正門石  
を入り斜め正面に、真円形の「緩やかなムクミ」の  
ある舗装台座に立て込み、キャンパスへのお出迎え  
として配した。

敷地内の緑化は周辺のみどりとの連続性のみなら  
ず、環境を意識した植栽計画により周辺環境の緑化  
に貢献しており、地域住民の憩いの場が形成されて  
いる。

#### 施工者達の技術力

巨石モニュメントや一枚石の門石の基礎工事も含  
めて、建築工事以外の、難易度の高いすべての外部  
ランドスケープ工事を「一式」で工事責任を持った  
のは、箱根植木である。建築工事に先立って、敷地  
内のスダジイやシラカシ等の高さ15m級の大径木  
を移植するための根系の環状剥皮工事に始まって、  
神殿外周の敷地境界部分に積まれて老朽化した玉石  
野面積みの石垣の新規石垣改修工事、すべての石貼  
り工事、流れ石組、流れ設備、排水工事、アスファ  
ルト舗装工事、照明電気工事から、高木の剪定整枝、

新規植栽まで。

新規石垣部分沿いには神殿周りの神社の杜の巨木  
が迫り、且つ神殿も近い。かたや敷地外には歩道と  
路線バスルートの車道が迫り、作業スペースはまっ  
たくゆとりがない。そこで、必然的に最終のバス便  
が終わった後の、夜間徹夜工事を余儀なくされた。  
この石積み工事に関しては、四国牟礼の和泉屋石材  
和泉成治氏に、箱根植木への全面協力を依頼した。

#### おわりに

このように、ランドスケープは理解ある建築家と  
密に協力しながら、建築以外の「外部すべて」を計  
画・設計し、造園の施工者はそれらに対して「勇気」  
を持って一式で請け負うべきだ。

単に植栽工事といった断片のみをゼネコンの下  
請けで安く請けるのではなく、外部の設備的な工事  
や、石工事、排水工事、コンクリート躯体工事、な  
ども含め一式で請け負うことによって、金銭的なス  
ケールメリットが発生する。特に工期が短い場合  
には、工事スケジュールの全面的コントロール権を  
手中にすることが可能となり、結果として「質」の  
高い仕事が可能になる。また一方で、設計者からし  
ても、最も大切な総合的な最終デザイン調整もか  
なり行い易くなるし、施主にとってはコストメリッ  
トも大きいということを施主に十分に説明して、ラ  
ンドスケープの設計者としての責任範囲を広げるべ  
きだろう。

ランドスケープのデザインは、最終的には素材感  
や細部の納まり等も含めて、1:1でどう見えるかの  
世界。空間のイメージやランドスケープのビジョ  
ンを共有できる設計者と施工者の一心同体的協力  
無しには、決して良いモノはつくれないと思うし、  
創造的で豊かなランドスケープの未来は見えて来  
ないだろう。（文=三谷康彦）

※國學院大學は、1882年（明治15）に母体である皇典  
講究所が創立されたことが起源である。1890年（明治23）  
に国史、国文、国法を攻究する教育機関「國學院」を設置し、  
1906年（明治39年）に「私立國學院大學」と改称している。

左／再開発前の國學院大學渋谷キャンパスの空撮（写真提  
供／國學院大學）。右／再開発後の空撮。立体型キャン  
パス化を目指し、緑量は屋上緑化部分が増えている（2点とも写真  
提供：國學院大學）。



既存のヒマラヤスギ巨木と、  
その奥の常緑照葉樹林、サ  
ワラ林に抱かれた神殿への  
鳥居。神殿前広場で、深々  
と一礼する人は多い



千年の道」という名のキャンパス・モールを行き交う学生たちや一般の人々。石の彫刻「翔」への視線の、砂利目地の長方形切り石の飛び石は、ランダムに配された飛び石部分で一旦「かたづけ」ながら、彫刻石に一直線に向かう。砂利部分下には暗渠トレンチ排水管や、雨水の樹蓋、電気のハンドホール鉄ふた等が隠されている

モニュメント「翔」の設置工事



巨石のモニュメント「翔」は、「東京スカイツリー」のデザイン監修者でもある彫刻家・澄川喜一氏の作品で、石材は瀬戸内海黒髪島産、長さ10mの伸びやかで美しい原石を最大限に生かしながら年月を掛けられて構想・制作された。キャンパスの正面・中央に巨石モニュメントが座る構成とした。手を合わせる祈りの姿、天に飛翔する姿を、古来の「鳥居」をモチーフにされ、抽象化されて制作された。左／彫刻基礎の150㎡のマス・コンクリート基礎。左中／130トンクレーンで、一基20トンの彫刻石を釣りこむ。右中／仮据えされた「翔」の間に立つ澄川氏。右／「翔」の夜景。存在感の増すライトアップ



門石2枚（太郎石、次郎石）

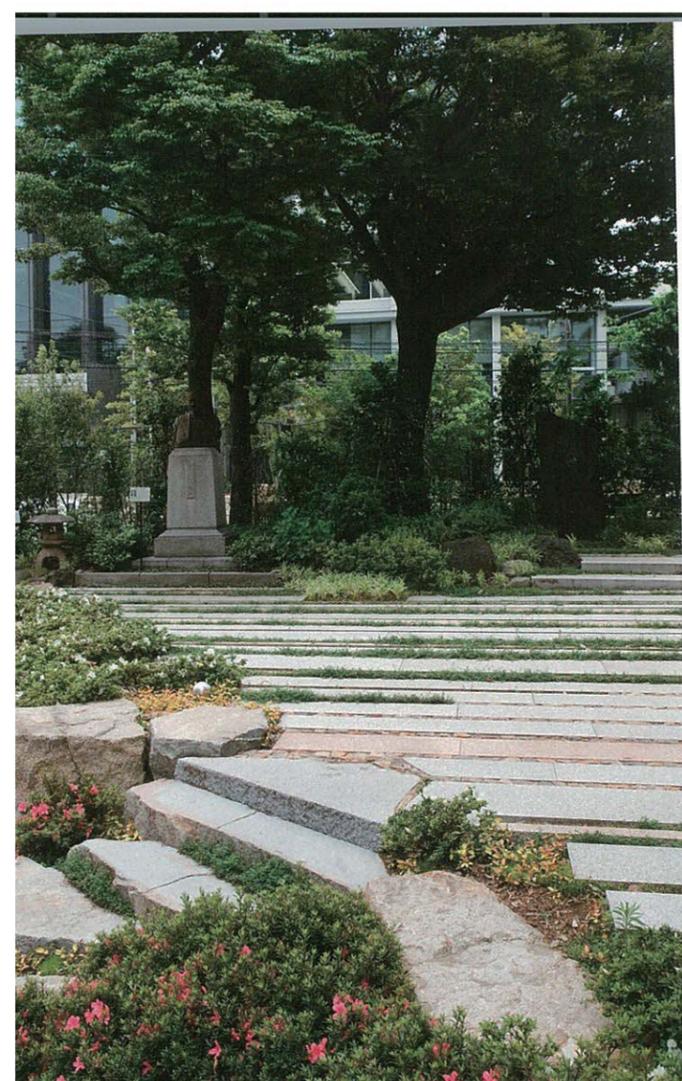
4m×8m×厚み2m弱の原石（瀬戸内海の犬島産花崗岩）を、三枚に「下す」形で四角半礼の和泉正敏氏に割石を依頼、そのうち2枚の兄弟石のネガ・ポジの割肌を90度開いて据えた門石2枚（石に人格を与え、太郎石、次郎石と命名）。割り込み時に出来た、削岩機跡も「人と自然」の関係を現す。正面玄関門石の設置間隔を7mとし、歩道部のレンガ舗装を敢えて門石周りエントリー部にも使用。空間の広がり感と、街の「空気」を導き入れる設えとした。



コルテン鋼鉄板土留め

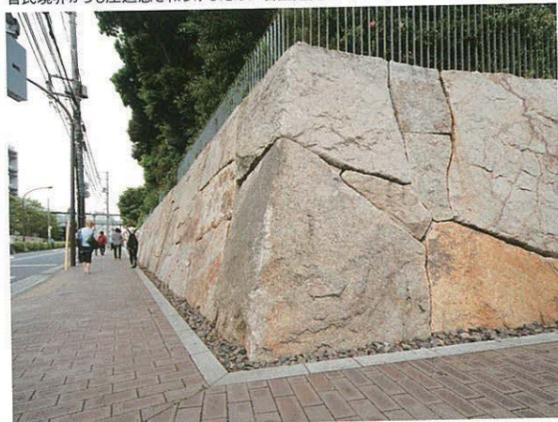
歩道に取り付け既存のスダジ高木やその周りの地形を保全しながら、老朽化し強度的に不安な玉石積み土留め壁を撤去。スダジ高木の根系を最大限に保全するために、最も薄く仕上げる事が可能なコルテン鋼の厚板鉄板による土留めとし、かつ歩道が広く感じるようにセットバックさせて据え付けた。「目からウロコ」の構造計画設計は、日建設計の車抜した構造家山脇克彦氏で、氏の斬新な土留め壁アイデア無しには、成り立たなかった。

※歩道舗装の中に植栽する街路樹に関しては、舗装材の基盤としてのCBR (California bearing Ratio) を確保しながら、かつ樹木の根系も入っている。コーネル大学のUrban Horticultural Instituteのニーナ・バサック教授開発になる「Structural Soil Mix」という特殊土を使用、根によって舗装材が持ち上げられ、歩行者が転倒するなどの事故が1000年経っても決して起きないように配慮されている。



左/石の重厚感、質感の溢れる温かい腰石積みは、大学キャンパスの落ち着きを提供し、本物を大切にする精神を同うことが出来る。右/神奈備川のせせらぎ。株立ちのモミジの向こうに、神社への石橋が見える

街と調和する石壁は、大阪城の城壁にも使われている石(瀬戸内海小豆島産・白石島産花崗岩)を使用し、街並みに本物の持つ温かみと落ち着き感を与えている。官民境界からも圧迫感を和らげるために石壁足元をセットバックさせている



学大木のヒマラヤスキ足元広場は、砂決の大判石によって踏圧の影響を抑えている。この広場には、大学所の胸像や碑などが据わり、先人にとっては思い出深い場所。斜面植栽部分の小階段は庵治石ムク土土決め

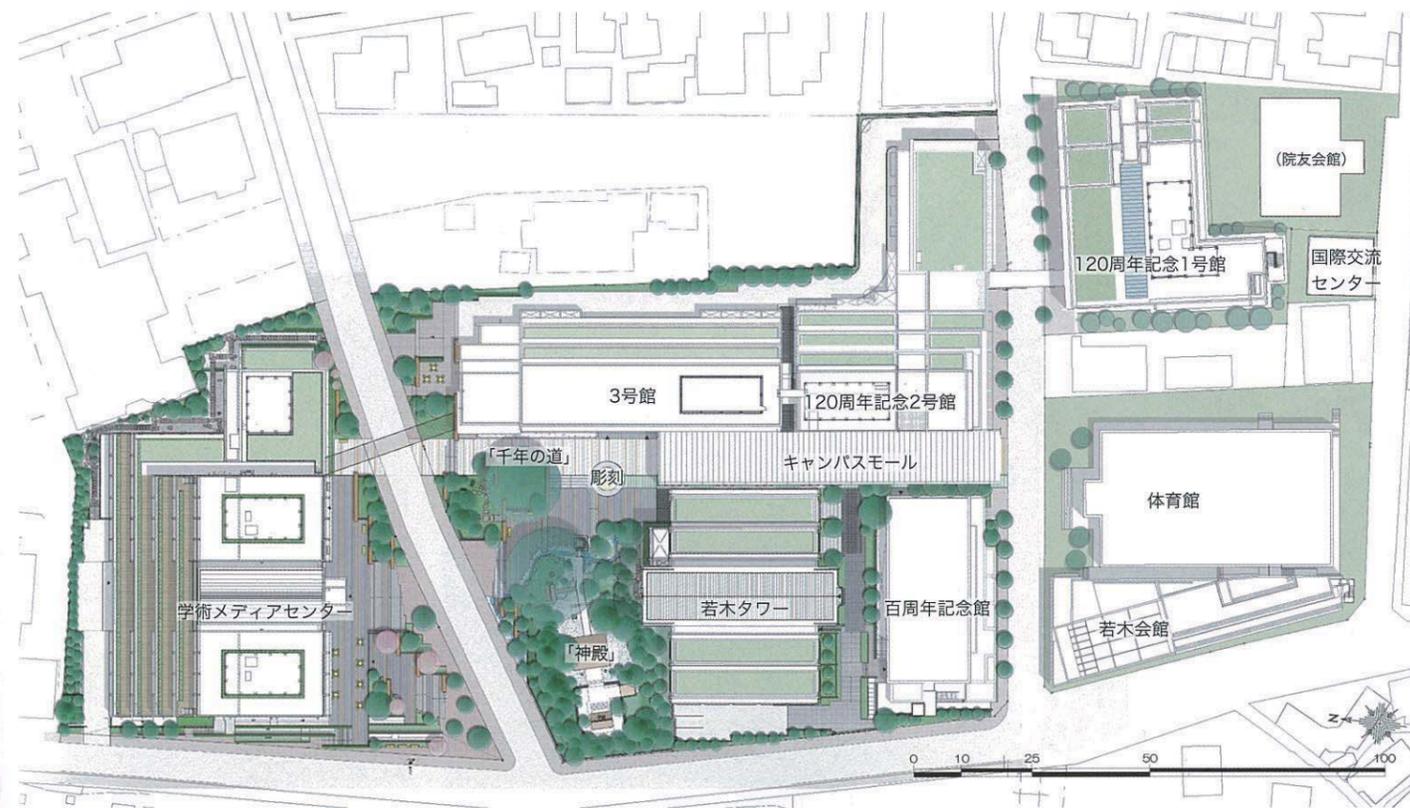


敷地境界線いっぱいには建物を配置するのではなく、道路に面して建物をセットバックし、人の歩きやすい広い歩道を確保することで、開かれた大学のイメージもつくれる。公道沿いの自立型壁面緑化や、低層階部分屋上などを可能な限り緑化することで、観に配慮し、ヒートアイランド効果の抑制、建物の遮熱効果も高めている

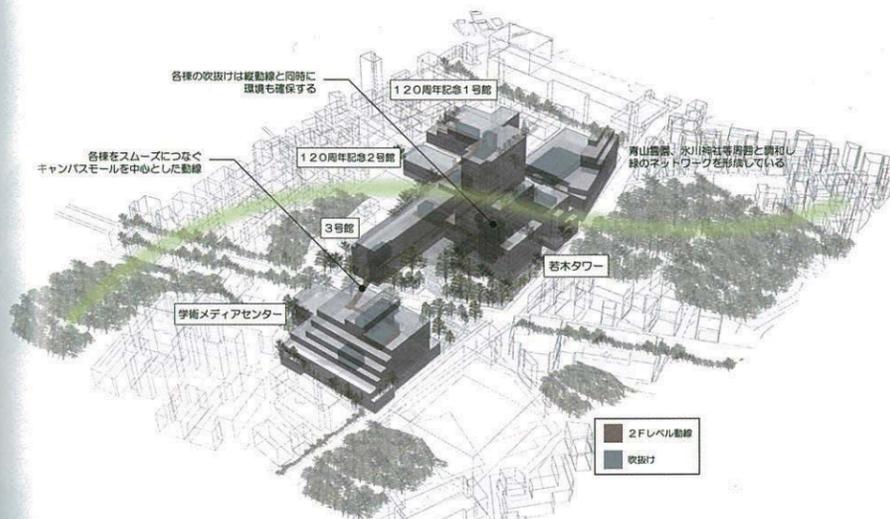


模式立面。公道によって、3つに分断された大学敷地をつなぎ留める、多様な「緑」の連続性

再開発建物東側立面図



3号館と学術メディアセンターをつなぐデッキから西に下る坂を俯瞰する



スマート・キャンパス、緑のネットワーク

キャンパスの緑は、青山霊園、常陸宮邸、氷川神社等周辺の緑と繋がりが調和し、緑のネットワークを形成している。また、渋谷から桜田門までの間に渋谷区によって制定されている「歴史の散歩道」沿いの「キャンパス」でもあり、散歩者や地域の住民

が楽しむことが出来る四季折々の豊かな花や緑を提供している。講義室や研究室といった機能空間のみならず、食堂やラウンジ、キャンパスモールなどの共用空間においては、活発な交流の場が生み出され、教育・研究のための機能的な空間と補完しあうことで、大学の知的・文化的雰囲気をつくりだしている

名称	國學院大学 渋谷キャンパス
所在地	東京都渋谷区東4丁目7番地5(6、9、10)
主要用途	大学
建主	学校法人國學院大学
設計期間	2001年4月～2008年6月
施工期間	2002年2月～2009年9月
竣工	2009年10月
規模	敷地面積 / 19,994.49㎡、建築面積 / 9,815.08㎡、延床面積 / 54,030.63㎡
内容	基本設計、実施設計、設計監理
設計監理	建築 / 株式会社日建設計(朝田志郎、川島俊彦、菊田剛正)、ランドスケープ / 株式会社 MLS (Mitani Landscape Studio, Inc.) (三谷康彦、相澤恵美、生田美菜子、亀井穂(元スタッフ))、協力 / 株式会社日建設計ランドスケープ設計室(甲田和彦、伊藤早介、小谷美菜子)、構造 / 株式会社日建設計構造設計室(山脇克彦)
仕様	床石張り石材 / 「千年の道」 軸線石張り(瀬戸内海産・小豆島花崗岩)、その他石張り(中国産花崗岩)、澁川先生彫刻周り円形石張り(万成花崗岩)、神殿周りに石積み石材(瀬戸内海産、小豆島、犬島、白石島花崗岩)、流れ・流れ脇の石積み(すべて取り置き再利用の筑波石)、レンガ舗装(ミッドランドブリック)、移植再利用樹木(シラカシ、ヤマザクラ、他多数)

- 外部ランドスケープ工事施工(建築以外全般) / 箱根植木(和田新也、大平暁、保永博文、大崎吾朗、沖洋光、川村貴之)
- 箱根植木協力施工業者 / 榊和泉屋石材店(千年の道石張り、神殿周りに石積み、門石など加工+施工)、黒髪石材(澁川先生彫刻制作、運搬・立て込み施工)、植島植木(庭師集団・植栽工事など)、クエルクス(植栽工事)、株廣緑苑(植栽工事)、株勝造園(植栽工事)、南田造園(自然石組など)、株 I.S.I.(中国産石材、石張り工事全般)、加藤花園植物場(樹木系植栽材料納入)、南中村農園(古典園芸植物、万葉植物など納入)、テック大洋工業(コルテン鋼鉄板擁壁工事)、株ベルックス(流れ水景設備)、パナソニック電気(照明器具納入)、株監工(木工事、デッキ工事)、株オーク建設(コンクリート型枠工事)、株北野(土留め矢板工事、植栽用客土提供)、興産業(くい打ち基礎工事)、国策ブロック(インターロッキング舗装工事)、大竹産業(インターロッキング舗装工事)、新通電機(特注手摺、その他特注金物制作納入)、大新電気工業(外構電気工事)、南東石(自然石納入)、廣橋工業(アスファルト舗装工事)、南船津土木(排水など土木工事一般)、株マコ建設(排水など土木工事一般)